

[HP D I O目次に戻る D I Oバックナンバー](#)

視点

平和指数は希望指数

—南北首脳会談がもたらした一つの土産—

No.141 2000年7月

朝鮮半島をめぐる南北会談は、20世紀最後の年にあって、歴史の1ページをめくる音が聞こえそうな臨場感を、世界の人々に与えてくれた。この会談をめぐる報道では、韓国マスコミが当事者の気持ちを伝える上で貴重なメディアだが、その一つ韓国中央日報は毎日『平和指数』を載せている。

記事によれば、『中央日報は韓民族の平和と統一の念願を盛り込んだ「韓半島平和指数」を公開する。韓半島平和指数とは南北間の政治・経済・軍事・社会・文化などあらゆる分野において、韓半島平和に影響を及ぼす事件を毎日分析、計量化して平和の程度を数値として表したものだ。韓半島の平和関連事件を約300個のキーワードで分析、15種類に類型化し、その類型によって加重値を付与した後、トータルして平和指数を算出する』というのだ。日々国内外で起こっている平和関連「事件」を、キーワードで分析し、の数値補正をした上で、平和指数は毎日発表される。

例えばこの指数による週間動向を見ると、『分断以来最初の南北首脳会談（6月13～15日）で、平和指数が急騰した一週間。週間平均は12.1に達した。13日異例の金正日国防委員長の空港出迎え、14日両首脳のマラソン単国会談で、14まで上昇した。引き続き、15日の歴史的な共同宣言の発表と金委員長

の対南誹謗中止命令で32に急上昇、16日にも韓国の対北朝鮮放送禁止と白
リョン島近海漂流漁船の即時帰還など、南北和解が本格化し、22を記録し
た。』となっている。次の週の週間平均はさらに高まり14.9に達した。

『19、20日は、南北赤十字会談開催確定・金正日（キム・ジョンイル）国防
委員長の肥料支援に対する感謝表示確認、北側からの外部官僚の北朝鮮訪問
再許可、南側からの対米「北朝鮮テロ支援国解除要請」などにより、22、23
の高い平和指数を記録した。しかし、チョ・ソンテ国防長官の「主敵」概念
変更不可発言で、24日にはマイナス−6に急落、平和指数の不安定性も見せ
た。』となる。ちなみに指数は次の表をもとに計られる。

経済的、軍事的な支援（−は敵対的行為）は値が高く、文化的交流や、口頭
でのやりとりは値が低い。例えば、北朝鮮の少年芸術団のソウル訪問が決
まったから6点、北朝鮮が韓国の政党を非難したから−1点、この日はプラス
マイナス（6−1）5点という訳だ。毎日の出来事を15項目の換算表にあわせ
て、指数を算出する。週毎には週間平均指数がでる。事件を計量化すること
なんてできるの、という疑問もありそうだが、「平和」を指数化するというこ
の発想はなんともユニークである。

しかもこの平和は、一般的、普遍的平和ではない。きわめて現実的で、人び
との（少なくとも民族の）希望を表現している。「平和指数」が高まれば、
それだけ平和の配当が増加する。「平和指数」は、安全保障上、アジアの安
定に貢献するだけでなく、アジア経済の発展に大きく寄与することも忘れて
はなるまい。

もう一つの特徴は、世界でもっとも難しい課題である「平和」を大変わかり
やすく翻訳したのものであることだ。朝鮮半島統一の目標（平和統一）と最
悪の結果（全面戦争）を両極にとり、事件がプラスに働くのかマイナスに働
くのか、今日の位置と動きが誰にもわかるようにはっきり示される。目標と
の距離も明確だ。政治家の言動は、この指数で計られるため、「本意ではな

い」という猫だましは通用しない。これだけでも、政治の透明性が格段に進むのではないか。

ひるがえって日本の政治、経済、社会を見ると不透明、混濁に汚染されつづけている。わかりにくさがあたりまえになってしまった。政治、経済、安全保障、環境、年金、医療、介護、教育、いじめ、雇用等等々、何をとっても、あまりにわかりにくいのが日本の現状なのだろうか。「居並ぶ有識者たちは、誰も納得できる答えを示してくれなかった。」ことがあまりに多すぎる。

しかし、不透明さが続く限り、将来への姿が見えにくくなるばかりでなく、21世紀への不安ばかりが増大していく。そこで、人のせいばかりにせず、私たち自身も自らの現状をより明らかに映し出し、「平和指数」のように、将来の希望の方向に進むような「指数」を出せないものだろうか。

生活環境改善のための「環境指数」。将来の社会をうかがう上で不可欠な「福祉経済指数」。よりよいコーポレートガバナンスをめざして、労働組合や従業員の参加度を示す「パートナーシップ指数」。高齢化、少子化等の社会構造の変化の中で求められる「連帯指数」。さらに「教育指数」や「育児指数」。そしてトータルな「安心指数」。

職場や、地域、家庭、学校等の生活している場所の現状と将来を見出す力を私たち自身が作り出すことが必要なのだ。労働組合はこのこの「指数」作りの頼りになる助言者ではないだろうか。もっとも、まず、わが「組合指数」からはじめなければならないかもしれないが。

これらの指数のユニークなところは、この社会の向かう先について、希望が入るところにある。希望する社会に向かって、もやもやを少しずつでも晴らしていけるかもしれないのだ。

さて、わが連合総研でも、勤労者の立場にたった生活の目安となる指標を模索中である。勤労者の生活の実態を正確に反映するとともに、21世紀の福祉経済社会に向かって、勤労者の生活向上に向けた政策に役立つものを作りたいと思っている。

参考；韓国中央日報ホームページ

<http://japanese.joins.com>

[HP D I O目次に戻る](#) [D I Oバックナンバー](#)